

イスラーム「主義」

——ウイグル族の信仰と社会に関する一考察——

西 原 明 史

Islam “ism”: A Study on the Religion and Community of Uigur

Akifumi NISHIHARA

はじめに

ウイグル族はムスリムである。というのは、少しでも彼らのことを知っている人にとって当たり前の事実だ。ただ、旅行中に出会い、仲良くなったというようなちょっとしたつきあい程度なら、彼らが真面目にイスラームを信仰しているのか疑わしいと思うかもしれない。何より彼らはお酒をよく飲む。そしてこう言うのである。「酒を飲まないムスリムは本当のムスリムではない」。しかし、飲酒はクルアーンでは「悪魔の仕業」として禁止されてはいなかっただろうか（鈴木、2002：397）。あるいはこんな言葉もよく聞く。「私たちはよく遊び、よく飲み、夜も寝ない民族だ。一体どうしたらいい」。実際、彼らと一緒にいる間、その人たちがムスリムの義務とされている礼拝を行う姿に出会うことなどまずない。敬虔な信仰の徒というイメージからはかけ離れたこのような生活ぶりが、ウイグル族のイスラーム信仰がひょっとしたら眉唾なのではないかと、旅行者に早とちりさせるのである。

一方、ウイグル族のイスラームを以下のようにとらえる人もいる。例えば私がそうであった。中国という大国の支配下で少数民族として生きざるを得ないウイグル族にとって、この信仰スタイルはいわば「戦略的適応」だと考えるのである。ウイグル族への取材を行っているとき必ずこんな言葉に出会う。「イスラームは宗教ではなく文化だ」。実際、共産党員の宗教活動については、「信仰と少数民族の風俗習慣に従うこととを区別する」という通達がある（毛里、1998：163）。このように習慣の枠内でしか信仰できない以上、せいぜい「コルバン節（犠牲祭）」や「ローズ節（断食明けの祭り）」といった年中行事に参加する時にしかイスラームには関われないだろう。しかし彼らは、中東あたりのムスリムに対して特に劣等感を持っているようには思えない。むしろこんなことを言うのである。「私たちはイスラームに改宗しておいて本当によかった。もし仏教を信仰したままだったなら漢民族に同化されて、ウイグル族なんて存在していなかっただろう」。つまり、国家に向けてはイスラームを習慣にまで矮小化してちゃんと「適応」しつつ、漢民族に向けてはそれを民族の看板として高く掲げているのである。置かれた状況に合わせてイスラームを巧みに利用している、私の目にはそう映った。

「戦略」として平気で利用するくらいだから、イスラームへの思い入れはそれほど深くはない。それが、フィールドワークを行い始めて間もない頃の私が、ウイグル族のイスラーム信仰に下していた評価である。ところが、彼らとのつきあいがとうとう20年目を迎えるほど長くなった今、

その評価を修正する必要があることを感じている。政府による制約は相変わらずであるにもかかわらず、実はイスラームが思いの外彼らの生活に根付いており、生き方や考え方にも大きな影響を与えていることを教えてくれる無数の事実に気づいたからである。そこで本論文では、まずはそのようにウイグル族の暮らしの中に息づくイスラームを民族誌風に記述していくつもりである。

しかし、本稿の目的はウイグル族のイスラーム信仰の実態を紹介することだけではない。それを材料にして、彼らの「信仰」、つまり神（アッラー）の存在と力への信念そのものを考察の俎上に乗せてみたいと考えている。イスラーム学の権威井筒俊彦によれば、イスラームとは「自分の全てを引き渡すということ。相手に一切を任せきる、奴隷のようになる、どうされようと意のまま」という「絶対的の神依存」を表す言葉だという（井筒、1983：371）。そこまで何かを、あるいは誰かを少しも不安を持たず一心不乱に信じることが本当にできるのだろうか。現代の日本人にとって当然の疑問である。そして、それこそがイスラームへの私たちの違和感や不信感の源になっているのは間違いない。しかし、きちんと神と向き合いながらも、それをあまり感じさせないウイグル族のイスラームは、そうした違和感を払拭してくれる可能性がある。そんなウイグル族の信仰のあり方を生み出すものを明らかにすることが今回の考察の目的である。

そのために、彼らはなぜイスラームを信仰するのか、またどの程度信じているのか、今後はどのように展開していくのか、そもそも信じるとは一体どういう行為なのか、このような問題について考えていくつもりである。

1. ウイグル族のイスラーム信仰

コミュニケーションの中のイスラーム

ウイグル族のあいさつは「ヤクシム・シズ (yahximu siz)」である。そう私は習ったし、もちろんちゃんと通用する。しかしここ何年か、こういう言葉で挨拶することが増えたという。「アッサラーム・アライクム (əssiləm ələykum)」と呼びかけ、「ワライクム・アッサラーム (wələykum əssiləm)」と返す。いずれも「神の平安と恩恵が汝らの上にあれ」（ひろ、1999：139）という意味を持つこれらの言葉は、ムスリムの義務とされる礼拝（ひざまづき、神に向かって頭を深々と下げる祈りの動作）の最後につぶやかれる文言でもある。礼拝の言葉が挨拶言葉として用いられるほど、イスラームがウイグル族の日常に浸透しているということだろうか¹⁾。

恐らくそうなのだ。こういう例もある。彼らがよく使う言葉に「ホダーイム・ブイリサ (hudayim buyrisa)」があるのだが、「もし神がお望みなら」という意味のこの言葉を、未来についての予想や希望を語る前に必ず加えなければならない。「もし神がお望みなら、私たちは来年また会えるでしょう」。「もし神がお望みなら、私は来年日本に留学したい」という具合に。その理由を聞いて見ると、次のような答えが返ってきた。「全ての運命は神が握っている。人間の思いや願い、そして努力だけで事が運ぶわけではない。人間は全く力のない弱い存在なのだ。だから神にひたすら求め頼らなければならない。そしてもし神が支持してくれれば思いは実現するし、

1) なお、『イスラーム辞典』によると、「多くのハディースもムスリムが互いにあいさつしあうことの大切さを伝えている。そうしたあいさつには、平安を意味するとともに、神への帰依を想起させるサラームの語が含まれることが重要とされ」と紹介されている（赤堀、2002：1）。要するにウイグル族は、イスラームの正統的なあいさつ言葉を使用し始めたということなのである。なおこれは携帯電話の普及の頃から広まったというのだが、その因果関係についてはわからなかった。

そうでなければどんなに努力してもうまくいかない。そう考えることが必要だ」。

また、分かれるときには「ホシ・アミサ (hox amisa)」(さようなら)の後に、「ホダーガ・アマナット (hudagha amanət)」(神があなたをお守り下さいますように)という言葉をつけるという。ここからも神への依頼と人間の無力というイスラーム的思考がかいま見られよう。ウイグル族は、会話の中で正統的なイスラームの型をきちんと実践しているのである。

こう考えてくると、彼らに特有の行動パターンがイスラームによって説明できることに思い至る。例えば、ウイグル族が自慢する習慣の一つに「ウイグル族は葬式に人を呼ばない」というものがある。彼らは知り合いだろうがそうでなかろうが、不幸があったらしいことに気づけば、仕事をほっぽり出してでもそこに行って慰問をする。だからわざわざ人に知らせる必要がないのである。私は以前、この習慣について、「これはお金の上に人を置くという私たちの伝統のためだ」という説明を受けたことがあった。しかし、どうやらそれだけではない。イスラームには「ムスリムがムスリムに対して果たすべき5つの義務」があるが、その内の一つが「葬式に参加すること」なのである(森, 2002: 816)。彼らは実はこの義務を履行していたのではないだろうか。

そして、これはつい最近の調査で確かに裏付けられたのである。「葬式に参加し、ナマーズ (namaz: 礼拝)を行えば、山のような報酬が得られる²⁾。だからみんな喜んでいくのです。これはウイグル族の習慣ではなく、ムスリムの規定ですよ。コーランにもハディースにもこれは記載されています」という言葉を聞いたからだ。イスラームの教えがちゃんとウイグル族の中に定着している証拠である³⁾。因みに、もしどうしてもいけなときは、誰かに頼んで代理で行ってもら。「心」を持っていってもらい、「心」だけでも葬式に参加するという。イスラームの規則を彼らがいかに重視しているかがわかる。

そもそもこの「ムスリムの5つの義務」の内の4つは、一目見ればすぐ気づくことだが、人と人の絆を強めるような機能を持っている⁴⁾。「あいさつを返す」、「葬列に参加する」、「招待に応じる」そして「病氣見舞い」と、いずれもコミュニケーションに関わっているものばかりだ。ウイグル族は「みんなが集まること」を意味する「ジャマアットチリッキ (jamaətqilik)」という言葉が大好きだ、と聞いたことがある。例えば「1人を誘えば、3人でやってくる」と言われるほど「みんな」ということを彼らが好むのはなぜか。それはイスラームの教えだったからなのではないだろうか。

ナザルとナマーズ

ウイグル族は仲間の輪を大事にする。言い換えれば民族としての一体感を強く意識しているのである。そしてそのような思いを起動しているのはイスラームであった。そう考えれば、その他

-
- 2) 死者のためにナマーズを行い、その際にドゥア (dua: 祈祷)を行うのは、死者の罪を洗い清めるためだとしばしば聞かされた。そしてそのように死者のために良いことをすれば、神はそれに報いてくれるということだろう。
 - 3) この義務に関連してさらに付け加えれば、「はじめに」で紹介したお酒好き、遊び好きの習慣も、もしかしたらイスラームの規定によるものではないかという気さえしてくる。『イスラーム辞典』によれば、5つの義務の内の一つが「招待に応じること」なのである(森, 2002: 816)。彼らはこのために、夜な夜な連れだって飲みに出かけるのかもしれない。
 - 4) 残る一つは、「くしゃみしたら“アル=ハムド・リッラー”と唱えることである」(森, 2002: 816)。この言葉には、「アッラーに讃えあれ」の意味があり、アッラーへの感謝として唱える言葉だという(森, 2002: 386)。

のウイグル族の行事についても、その意図を説明することができる。

彼らが頻繁に行う宗教行事に「ナザル (nəzir)」がある。喜び、もしくは悲しみをもたらす出来事が家族に生じたとき必ず実施される祭祀だ。結婚、就職、昇進、新築、引っ越し、退院、大学合格、割礼といった嬉しい出来事の度に、あるいは葬式、事故、倒産、病気、失敗といった悲しい出来事の際にも行われる。また出張や旅行、巡礼、留学、大学入試や遠方の大学への入学といった不安な出来事が待っている時にも開かれる。その他、死者の命日には定期的に行われるし、村や郷など地域全体で豊作を求めるナザルも実施される⁵⁾。さらには先祖が夢にしばしば出てくるときにも必ず実施されると聞く。

このナザルでは、モスクでの集団礼拝の司会ができる資格と能力を持った「イマーム (imam)」が各家庭に呼ばれ、クルアーンを読むことが求められる。さらに親戚や友人も手みやげを持って訪れ、一緒にクルアーンの読誦を聞く。そして自由な形式の祈祷である「ドゥア (dua)」をイマームに音頭をとってもらって全員で行う。その後は食事や談笑の時間である。このような段取りのナザルが、一家で年に7、8回は開かれるし、月に3、4回はどこかのナザルに参加することになるという。

ではその目的は何か。ナザルを行うきっかけは実に多岐にわたっており、一様には言えないところもあるが、強いてまとめればまず何より神への祈願である。嬉しい出来事が実現したのは、もちろん神が望んだからである。従って神へ感謝の言葉を捧げなければならない。辛い出来事の時は、そこから救い出してもらおう神に頼まなければならない。未知の世界へ挑戦するときは、神のご加護を求める必要がある。また死者が天国に行くためには、生前の罪を消し去るよう神にお願いしなければならない。そもそも死者が夢に出てくるのは、その要求だということを聞いたことがある⁶⁾。

加えて言えば、ナザルにはコミュニケーションという目的もある。そこに集まった人々との間だけではない。喜びを先祖に伝え、それを分かち合うためにナザルを行うというのもよく言われることだ。つまり死者との対話もこの機会に図られるのである。ナザルは親族や地域社会の交流を促進する場であると同時に、この世とあの世を結ぶ役割も果たしていると言えよう⁷⁾。ナザルはあまりにも頻繁なため、経済的・時間的な負担も大きく困っているという意見もある。また基本的には私事のために開催されるものだ。なので、考えてみたら別に人をたくさん招く必要はない。神に祈願するだけのためなら、招待するのはイマーム一人で十分なのである⁸⁾。にもかかわ

5) このナザルを「サラハットナザル (sarahət nəzir)」と呼ぶ。毎年春に、郷や村単位で実施され、その地区の全ての男性が参加するという。なお、女性は参加できない。普段礼拝を行うモスクではなく、その地区の一番大きなモスクに集まり、丸1日かけてクルアーンを一冊読み終わるといふ。そして全ての家庭が豊作になるよう神に祈るのである。その後、男性たちだけでナザルアシ (nəzir ax) と呼ばれる食事を作る。羊の油で煮込んだご飯、ポロを作ることが多い。大量に作るからである。なお費用は全て参加者各自が持ち寄る。

6) 生前、どれだけクルアーンのアヤット (句や節) を唱え、ドゥアを行ったかは、「最後の審判」の際の判定材料になる。そしてそれは本人の死後、遺族によって彼のために行われたものによっても補填できるとされている。従って、ナザルの際に人々は死者や祖先のために祈り、唱えるのである。

7) ウイグル族は死者の葬式の一週間後、大規模なナザル「スバラ・ナザル (sparə nəzir)」を行うが、それは親戚友人一同に、近親者の死による心の痛みが晴れたことを通知するためでもある。ナザルの目的の一つがコミュニケーションであることが、ここからも窺われる。

8) 各家庭がナザルを頻繁に行っているわけだから、イマームはひっぱりだこになる。しかし、当然都合が悪いときもある。また近くにイマームが居住していない家庭もある。そういう場合は、クルアーンを上手に読める近所の長老格の老人を呼ぶことも多いという。ナザルの趣旨によってクルアーンを読むべき箇所が決まっているとはいえず、自由に読みたいと思うところ、上手に読めるところを読めばいいので、専門の職能者でなくても問題はない。

らずこうして盛大に行われ続けるのは、それが絆を深めるというイスラーム上の義務のためであるとすれば納得がいく。

そしてもう一つ、ウイグル族独自の、というわけではもちろんないが、彼らがとりわけ重視する行事に「ナマズ (namaz)」がある。いわゆる1日5回の礼拝のことであり、ムスリムの最も大事な義務である5行の一つでもある。あるウイグル族の友人から聞いたことがある。「世界中の海や川と同じだけのインクを使い、世界中の森林の木々で作ったペンを使ってもナマズの価値は書ききれない」と。また、これを行えば行うほど、心の中の悪い考えや犯した罪が洗い落とされていくというのもよく聞く話だ。このナマズは、自宅でもどこでも行うことはできるし、それも大切なことだが、モスクでのそれはずっと価値が高いという。そこでのナマズは他の場所のナマズの72回分に当たるという声も聞いたことがあるくらいだ⁹⁾。モスクにはイマームがおり、彼が大変美しくクルアーンを誦する。それを耳にすることができるからだろうか¹⁰⁾。そして、ここで41日間ナマズをすると、それまで行った過ちが全て消えてなくなるという。既に述べたように、公務員や大学生、共産党員はナマズをモスクはおろか自宅でも行ってはいけないようだが、退職した公務員や農民、商人など、この制約に触れない人はモスクに向かう¹¹⁾。

次に、ナマズの段取りをきいてみたい。ムスリムは早朝、正午、午後、夕方そして深夜と、1日5度の礼拝を行う義務がある。時間が来ると、「神は最も偉大な存在、さあ早く来てナマズをしなさい」という声がモスクの方から聞こえてくる。ナマズを呼びかける声、アザーンである。やがて人々は三々五々、地域のモスクに集まり、イマームの司会でメッカの方向に向かって、立ったままのお辞儀、そしてひざまずいてのお辞儀を含む一連の動作を始める。一日で合計32回これを行うことが望ましいとされている¹²⁾。その後、参加者みんなが絨毯が敷かれた床に座り、イマームがクルアーンを読む。出席者はそれを聴く。そして今度はクルアーンの文言を使って、神を賛美する言葉を語る。自分の言葉ではなく、あくまでクルアーン上の言葉を使わなければならないのだという。なぜならそれが世界で最も美しい言葉だからである。

9) なお、『イスラーム辞典』によれば、72倍ではなく、「25倍または27倍の価値がある」ということであった(森, 2002: 418)。

10) 新疆の少数民族の宗教事情に詳しい王建新によると、「コーランを読めない人の場合は、コーランを所有することより、他人の朗読を真剣に聴くのがよいとされる。コーランの朗読に美と力を感じ、耳にしたことを実践できれば、読む人と同じようにアッラーから恩恵を受けられる」という(王, 1999: 123)。モスクに行けば専門家のクルアーンを耳にできる。従って、家で一人で行うより功德があるとされるのであろう。

11) しかし、実際にはこの規定はそんなに厳しくないという声も聞いたことがある。さすがに党員や公務員がモスクに礼拝に行くという話は聞いたことがないが、大学生は平気で入っているようだ。また新疆では18歳以上にならないとモスクには入れないという規定があるそうだが、私の知り合いの高校生もナマズのためにモスクに通っていた。なお、コルバン節やローズ節などのお祭りの時には、誰でもモスクに入っている。これは民族の文化と見なされているからである。因みにナマズの出席者数だが、農村地域の規模が比較的大きい中核的なモスクで、忙しい夏場はせいぜい10数人、農閑期の冬で3~40人だそうだ。

12) このうち、17回分がパルズ (p̄ariz) という神の命令である。どんなことがあってもしなければならないほど重要である。3回分がワジップ (wajip) で、条件が整っていれば必ず行わなければならない。もし条件が合わなければなくてもいい。12回分がスンナット (sunnat) で、神の望みではなく、使徒であるムハンマドが期待する義務である。これを行わなくても神は何も言わないが、ムハンマドは不愉快になり、「私の弟子ではない」と言うのだという。これは、私が10年来取材させてもらっている、ウイグル族のあるイマームの理解である。

以上が集団ナマーズの一般的な光景だ。しかしウイグル族の場合、それに加えて次のようなプロセスが続く。出席者全員が、三つの言葉をそれぞれ33回、計99回唱えるのである。これは神の99個の名前を示している。つまり神の名を99度唱えるという意味だ。具体的に言うと、アラビア語で「スプハーナッラー（神に誤謬はない）」、「アル＝ハムド・リッラー（全ての賞賛は神のために）」、「アッラー・フー・アクバル（神は偉大なり）」という三つの言葉をつぶやく。その後、今度は「ラーイラーハ・イッリラー・ムハンミディンロスルリラー（アラーの他に神はなし、ムハンマドは神の使徒なり）」という言葉で11回唱える。そして最後にドゥアを行う。この時のみ自由に心の中で唱えて良い。ただし表現は自由とはいえ、基本的な内容は、まず「今日のナマーズを受け取って下さい」という神への祈願と感謝、そして次にムハンマドへの感謝、最後に父母など身近な人への感謝と、だいたい決まっているという。こうして一回のナマーズが全て終了する。だいたい10分、長くても30分くらいだろう。これがウイグル族のナマーズの風景である。三つの言葉を唱えるところからは必須ではないそうだが、ウイグル族の間ではもうすっかり定着した習慣だとも聞いた。

そして、宗教行事としてのナマーズが終了した後で、イマームが世俗的な事情について布告を行うこともある。例えば、道路を修理する、井戸を掘る、道端に植樹をする、用水路を掘る、橋を造るといった村や郷の政府による公共土木工事への協力がここで呼びかけられたりするという。つまりイマームは地域共同体の行事に関するスポークスマンの役割も果たしているのだ。また政府関係の活動以外にも、地域に長期入院や高額な手術が必要な患者が出た場合、イマームがモスクに集まってきた人々に寄付を呼びかけることも多い。要するに、彼は地域の人々の支援を動員する役割を果たしているのである。純粋なイスラームの礼拝のみの行事と考えられるナマーズだが、実はナザルと同様、地域の人々をつなぐ役割も果たしている。つまり、ナザルとナマーズへの参加は、神への祈願に加えて、「ジャマアットチリック」というもう一つのムスリムの義務を果たすためでもあったのである¹³⁾。

イマームから見るイスラーム

ナザルやナマーズで活躍するイマームは、いわば地域の長老格の存在である。イスラームについて総合的な知識を持ち、クルアーンを美しく読誦できなければならない。そして人格的にも飛び抜けて優れた人が初めてイマームになれるという。イマームについてある人にインタビューしている時、「そういう人だけが人々のためにイマームになってあげられる」と語ってくれたことは印象深い。イマームとは恐らく奉仕や貢献といった性格を帯びた役職なのである。

それを裏付けるのが彼らの日常での役割だ。地元によくない行動をとる若者がいれば、道端で、あるいは家を訪ねた折にきちんと指導をする。しかもただ叱るのではなく、クルアーンの言葉を引き合いに出して諭すという。一度でだめなら二度、そして三度まで粘り強く指導を繰り返すとか。そういうことを期待して、イマームに説得を頼みに来るケースもある。大変であるにもかかわらずイマームがこのような風紀指導に熱心なのは、せっかくナマーズを行っても、イスラームの決まりに合わないことをしているとナマーズの効果が消えてしまう、と考えられているためだ。イマームは、良くない行動をとる人を救うために何も恐れないし、苦勞を惜しまないと教えても

13) 定年退職した公務員が、あわててモスクに通うようになるというのもよく聞く話である。それまでは職場での人間関係があったので心配なかったが、退職した途端、そういうつながりがなくなる。そこでモスクに出かけ、地域の人々とのつきあいを作ろうとするのだという。

らったことがあるが、まさにその通りである。

葬式の際にもイマームは人々のために貢献している。ウイグル族の葬式では、死者の身体をきれいにぬぐい、白布を身体に巻かなければならないが、その仕事を誰に行わせるかはイマームが決めて直接依頼する。また参列者に配るチャシカ (qaxkha) つまりドライフルーツやピーナッツなどのお菓子やお金 (遺体を洗ったり、墓穴を掘ってくれた人へのお礼)、布 (参列者が頭や腰に巻く) をどのくらい用意するかも彼が決める。死者の家庭の経済状況を鑑みて決めるのである。ということは、イマームは地域の各家庭の状況を詳しく把握しているということになる。実はそれのみならず、一人一人の欠点から長所までその性格も事細かく把握しているのである。70代のイマームであれば、同年代から40代くらいまでの人々についてはほぼ正確に知っているという。

このように地域社会と密接に結びついているからこそ、イマームには地域社会に起こる様々なトラブル、例えばけんかや離婚、財産分与の争いなどの調停を頼まれることも多い。誰に聞いてもイマームの仕事の一つとしてこの調停が挙げられるほどで、彼にとって代名詞的な活動のようだ。そして特筆すべきは、このように様々なところで地域社会に貢献しながら、そのための報酬は一切もらわないということである。そうした活動でお金をもらうことはアラビア語の「アラム」という言葉で表現されるそうだが、過ちなのだという。イマームはボランティアで全ての仕事を請け負っている¹⁴⁾。彼は人格的に優れた人でなければならないと上に述べたが、その具体的な中身は、「誰かのために尽くす」ことを厭わないということだったのである。

そして、イマームが高度なイスラームの知識と理解を持っていることを考え合わせれば、彼のこのような人格はイスラームに由来することは想像に難くない。イマームにせよ、イスラームに熱心な人にせよ、彼らが一番強調するのは「イスラームを超えないこと」である。これはクルアーンとハディース以外の本に書かれていることを信じたり、神以外の存在に祈願することを意味するが、逆に考えればムスリムの思考や行為は全てこの2冊の本から形成されることになる。イマームの「誰かのために尽くす」という精神はイスラームの教えだったのである。

そして、このような精神は一般のウイグル族にも共有されているように見受けられる。例えば葬式の際の儀礼的なやりとり、それは明瞭に現れている。遺体を埋葬する際、イマームと参列者の間に以下のような掛け合いがあるのである

イマーム：故人は皆さんに悪口を言ったかもしれない。皆さんとけんかをしたかもしれない。しかし彼もこうして亡くなった。彼を許してあげますか。

参列者：許してあげます。

イマーム：故人がお金を借りたまままで返せなかった人もいます。その人はここで名乗り出て下さ

14) 中国では、イマームは政府の一部門である民族宗教委員会に管理されている。彼らの生活費はそこからの給料と地域の人々の寄付からなる。イマームによってその給料は異なるが、今年(2010年)聞いたところでは、ジュマ・ナマズ(大規模な金曜礼拝)を行うようなモスクのイマームは毎月1000円くらいだという。一方私が取材したある村の小さなモスクのイマームは、月150円で、3ヶ月に一度もらえるということだった。しかも給料が出るのはイマームになってから3年後だという。彼らは国家公務員ではなく、国家が承認する宗教専従者である。といっても、農業が生業で、そのかわりイマームを行う人もいた。そもそもイマームはその仕事で給料をもらうこと自体「アラム」になるのだという。しかし本文で述べたように彼らの仕事は多忙である。日々のナマズの主宰に加え、ナザルや葬式、調停活動で週に2、3回は家を留守にしなければならない。どうしても本業に専念することが困難であるため、そのいわば補填としてこの給料が支給されているのである。

い。(もし名乗り出れば、後で借金を返す相談をする)

イマーム：この人の一生のうちには、人の庭の果物をとったり、人のものを盗んで食べたことがあった
 かもしれません。それも許してあげてください。

参列者：許してあげます。

こんな感じの呼びかけがあるそうだが、もちろん現実に果物を盗んだりしたことを問題にしているのではない。イスラームの教えに反するような行為の比喩としてこういう表現をとっているのである。それはともかく、葬式ではイマームから故人に対する許しが求められ、そしてその申し出が人々に受け入れられる。葬式でもイマームは調停役を担い、人々はそれを受諾するのである。埋葬が終わり、人々が7歩去った瞬間から生前の行いについての審判が始まるそうだが、そんな重大事の間際になされるこの「許し」は決して口だけのものではないはずだ。現にこの掛け合いの後、イマームが「神よ、故人に幸福をお与え下さい。どうか彼を受け入れてあげてください」という意味のドゥアを行い、人々はそれに続く。そしてこのドゥアは、その後いわば半永久的に行われ続けることになる。ウイグル族の墓地は住宅地や道路に面したところにしばしば設けられるが、それは通りすがりにいつでもこのドゥアをしてあげるためなのである。

このように死者を許し、尽くすだけではない。イマームに調停を求め、その裁定を尊重することから¹⁵⁾、ウイグル族は日常から「許す」「譲る」ということを自らの行動の型にしているように思われる。また前節で紹介したように、地域の公共工事への協力や寄付といったことが行われることも併せて考えれば、彼らもやはりイマームと同様、「誰かのために尽くす」ことを重視しているのである。すぐ上に述べたドゥアの言葉を借りれば、「誰かを幸せにする」ことを願い、行動すると言ってもいいかもしれない。ここまで何度も取り上げてきた「ジャマアットチリッキ」の本当の意味、それは、お互いに幸せを送りあうことによって、みんなで気分良く過ごすことだったのである。そして、再度強調しておきたいのは、「誰かのために尽くす」ことも「ジャマアットチリッキ」もイスラームの教えに基づくものだということである。

2. 信仰の「生態学」

信念と利得

ここまでウイグル族の日常生活に根を下ろしたイスラームについて点描してきた。あるいは逆に、ウイグル族の生活習慣がイスラームによって規定されていることを示してきたと言ってもいいかもしれない。葬式やナザル、ナマーズはもちろん、公共工事も寄付も全てイスラームに基づくものである。神への祈願と、神の求めに応じた信者の義務としてのジャマアットチリッキ。彼らはこの二つをイスラーム信仰の実践と見なしている。そして後者の方は身分や立場に関わらず実行されている。その意味でウイグル族は確かに熱心なイスラーム教徒なのである。

それにしても、誰もが感じる疑問だと思うが、ジャマアットチリッキは果たして信仰などと呼べるものなのだろうか。「誰かを幸せにする」ことは別に宗教と関係なく、誰が抱いてもおかしくない思いである。にもかかわらずこれを信仰と見なすならば、そもそも信仰とは何なのだろうと言いたくなってしまう。言い換えれば神を信じるとは一体どういうことなのだろうか。また、

15) イマームはふつう地域の人々によって選ばれる。イスラームの知識や理解に加えて人格が優れている人がイマームに押されるのである。自分たちが「この人なら大丈夫」と思って選んだイマームだからこそ、その言葉を尊重することになる。

それはなぜ生じるのだろうか。

これらの様々な問いかけを考える上でとても大きな示唆を与えてくれたのが、浜本満の「信念の生態学」という考え方である（浜本，2008）。彼は、何かを信じるとは、それがもたれ命題であれ、「つねに複数のオプションの現実的な可能性と、そうした複数性をふまえた上での選択——世界への実践的な関わりの中でなされている一種の賭け——の含意がある」と述べる（浜本，前掲書：126）。要するに、様々な選択肢からあるものを選び、それに賭ける（浜本は「あてにする」、「あてこむ」という言い方も使っている）ことが、すなわち「信じる」という行為なのだ、と彼は断じている。大変説得力のある意見だ。これにならえば、神を「信じる」とは、つまり神を「選び、賭ける」ということになる。様々な神から一つ選んだととらえてもいいし、神を信じないというもう一つの「オプション」と比べた上で、あえて神を信じる方に「賭けた」、と考えてもいい。いずれにせよ、これが信仰という行為の内実なのではないだろうか。

また、なぜ神を信じるのかについても、信仰を「賭け」と比喩的にとらえれば、論理的に答えを出せそうである。信じることが一種の「賭け」である以上、勝つこともあれば負けることもある。それを承知で「ある神を信じる」ことを選んだとすれば、そこには「それが大きな利得——救いと永遠の生命——をもたらす割の良い賭けである」（浜本，前掲書：127）という判断が働いたはずだ。つまり、イスラームを信仰すれば「得をする」可能性が高いと思ったから信仰し始め、実際に「得し続けている」からこれをずっと信仰しているのである。

イスラームの「オプション」

ただ、このあまりにも抽象的で功利主義的な論考は、たちまち次のような具体的事実に基づいた批判にさらされそうだ。「ムスリムは生まれつきのムスリムである。あれこれ考えた末に、『よし、これがお得そうだからこれにしよう』などと選び取ったものではない」。全くその通りである。ウイグル族もちろん誕生以来、ムスリムとして様々な儀礼を経験し、いつの間にか自分はムスリムであるという自己意識を獲得していくのであろう。幼児の頃には割礼を受けるし、名前はイマームに付けてもらった人も多い。また家庭ではナザルがしょっちゅう開かれ、イマームが美しい声でクルアーンを唱えるのを何度となく聞いているだろう。毎年行われる犠牲祭や断食明けの祭りでは学校も休みになり、その祭りに参加しなければならない。となれば、自分が例えば漢民族とは明らかに違うことに幼少の頃から気づいていたはずだ。こうしてムスリムとしてのアイデンティティが形成される。それはそれで決して間違いではないだろう。

しかし、それにもかかわらず他の選択肢がなかったとは言えないのではないか。確かにムスリムとして生まれ、ムスリムとして育った。しかしだからといって、イスラームの様々な規定を実践すれば天国へ行ける、と心から信じるようになるとは限らないからだ。気が抜けるほど単純でわかりやすい例を挙げよう。私の知り合いのウイグル族の若者は、高校2年の頃に初めてイスラームに目覚め、一生懸命クルアーンを読み、イスラームについて勉強し、友達とそれについてさかんに議論するようになった。逆に言えばそれまではそうしていなかったのである。何かがきっかけで、彼はイスラームを信じ始めた¹⁶⁾。ムスリムとしてのアイデンティティそのものは物心ついた頃からあっただろうが、それが彼の考えや振る舞いを規定するほどの影響力は発揮していなかったのである。

16) この若者の場合は、高校の級友からイスラームについての話を聞いたのがきっかけであった。その後は彼のアドバイスの下、イスラーム哲学の解説書やインターネット上のHPなどで勉強し、イスラームへの理解を深めていったそうだ。その友人を今でも「師父」と読ぶほど、深い影響を受けているという。

そもそもクルアーンの知識がなければ、実践に生かしようもない。そうなれば、イスラームに合わない行動をとってしまう可能性も出てくる。つまり他の選択肢を選んでしまうこともあるだろう。

このような例は実は枚挙にいとまがない。上述の知り合いの若者から聞いた話だが、彼の叔母が「来年、私の畑ではブドウが豊作になるわよ」と彼に語ったのだという。その時、彼はすぐに気づいたそうだ、彼女が例の「ホダーイム・ブイリサ（もし神がお望みなら）」という言葉をつけなかったことに。そして案の定、天候不順で彼女の畑のブドウは全て病気になって枯れてしまった。彼によれば、「彼女はうっかり忘れたのではない。普段から神を軽視しているから言い忘れたわけだし、まただからこそ神は彼女のブドウが実ることを望まなかったのだ」という。彼女は実は警官なのだが、イスラームの規範よりも公務員としてのそれに強く影響されていたのだろうか。因みに単なる傍証にすぎないが、彼女は33歳で結婚している。比較的若い年齢で結婚することが多いウイグル族としては珍しいケースだ。イスラームでは結婚はスンナット（ムハンマドが期待する義務）である。「<結婚は信仰の半ば>といわれ、結婚が強く奨励されている」という（小杉、2002：356）。ウイグル族が早婚なのもムスリムの義務によるものであろう。そしてその義務を実行しなかった彼女は、イスラームの対抗的オプション、例えば「経済的に自立できてから結婚する」という現代中国の若者の価値観とか、「できるだけ結婚を遅らせる」という一人っ子政策の規範の方を選んだと言えるのではないだろうか。

またウイグル族にはイスラーム以外にもシャーマニズムや妖術、呪術が浸透しており、今でも一定の影響力を持っている。例えば、いわゆるシャーマンであり妖術も行えるとされるバクシ (bahxi) はクルアーンとは別の治療や呪詛の本を所有しており¹⁷⁾、それを学んで特殊な力を身につける。呪術師に相当するモルラ (molla) は、クルアーンやムハンマドが残したドゥアを徹底的に学ぶ。特定の箇所を何百万回も読み続けるという。このような修行法を「カシーダ (qhāsida)」というが、これを成し遂げると何と精霊ジンと交流できるようになると言われている。この能力を身につけたモルラは、ジンに話を聞くことで病気の治療を行っていくのである。このようなウイグル族の霊的職能者たちは皆、イスラームの規定に照らせば罪を犯した存在と見なされる。クルアーン以外の本を信奉し、また神以外の者の力を借りているからだ。しかし、以前はもちろん、現在でもバクシやモルラを目指す人はいる。私はある70代のイマームから、「実は14、5歳の頃、モルラの修行をしたことがある」と打ち明けられたことさえある。果ては、イマームでありながらモルラの活動も行い、バクシと疑われていた人も知っている。イスラーム以外のオプションはちゃんと存在してきたのである。

この章の冒頭で、果たして信仰と言い得るのかどうか疑わしいとした「誰かを幸せにする」という考え方にしても、「自分さえよければ他人はどうなってもいい」、とか「他人であれ何であれ、自分の利得のためなら何でも利用する」という対抗的な選択肢がある。実際、そのようなウイグル族はいる、と常に噂されている。「公安局のスパイ」という言い方で後ろ指を指される人は結構多い。そういうオプションがある以上、「誰かのために」という思いもまた「選ばれ、賭けら

17) 私はこれまでバクシを霊的治療者とし、ジョディギヤル (jodigal) と呼ばれる者を妖術師と考えてきた。ジョディギヤルは、干し果物や卵などに呪いの言葉を吹き込み、それを食べさせて病気にさせるとか、玄関の敷居に同じ処置をした釘などを埋め込んで、そこを通る人を病気にしたりする。一方バクシは病気の治療だけを行うと考えていたのだが、2010年8月の調査では、誰もが異口同音にバクシとジョディギヤルは全く同じ存在だと語ってくれた。依頼があれば一方でジョダ (災い) を送り、一方でそれを消去するのだという。

れた」信念、つまり「信仰」だと言い得るのである。

信仰の理由

とすれば、私がこれまで常に取り組み続けてきた、「なぜ信じることができるのか」という疑問にも一つの答えを見出すことができそうな気がする。例えば上述したバクシは、真っ赤に焼いたスコップを患者の傍らに置き、それを裸足で踏みつけた後、すぐさまその脚で今度は患者を踏みつけるというような治療を行う。そうすることによって彼の病気が治ると語るのである。また、モルラは精霊ジンと話をし、患者の病気や治療法を知るという。そういうことをバクシやモルラ自身が語り、またそれを当たり前のように受け止めるウイグル族がいる。またそんなことはあり得ないと言いながら、「しかしくルアーンを唱えながら患部を抑えれば、頭痛や歯痛くらいなら治る」と語る人もいる。どっちにしても不合理なことだとしか私には思えないのだが。そのような語りを聞いて、彼らはバクシやモルラの治療を「信じている」のだと私は考えた。そして、ウイグル族はなぜこのような非科学的なことを「信じる」のか、という問題を立て、研究テーマの一つにしてきたのである¹⁸⁾。色々と考えてきたが、今回参考にした「信念の生態学」からも一つの解釈ができそうだ。要するに彼らは、治らないという可能性と引き比べて、治る方に「賭けていた」のである。

ではなぜ治る方に賭けるのだろうか。そんな方法では治らない、と科学的・合理的に考えるのが普通ではないだろうか。現に、バクシやモルラの治療など「信じない」という人もやはりいくらでもいるのである。「信じる」か「信じない」か、言い換えれば「賭ける」か「賭けない」かは、どうやって決まるのだろうか。バクシやモルラの例について言えば、やはり「利得」ではないだろうか。信じた方が得だと思えばそうするし、損だと思えばそうはしない。実際「病は気から」なのだから、治ると強く信じた方が良い結果を生むかもしれないのである。

もちろんある信念が選ばれるのは、利得からだけではない。浜本が挙げている「世の中なにごともうまく行かないようになっていく」という信念について言えば（浜本、2008：141）、現実には何もかもうまく行かなければうまく行かないほど、この信念は強固になっていくはずだ。このように利得がないことでかえって信念が強化されることは確かにある。しかもこの場合、この信念を持っているが故に「実行に身が入らず、必要な配慮や準備も怠るかもしれないので、その結果実際に事はうまく運ばなかったりする。かくして自分の振る舞いを通じて彼は当初の信念を真理化してしまうわけである。このように信念が、自らを真理化するプロセスを内蔵している場合、それがもたらす利得のいかんにかかわらず、まさに真理であることによって存続し、場合によっては言説空間を席卷しうる」（浜本、前掲書：141）。要するに、ある信念が放棄されず、むしろより強く信じられていくためには、利得を得られるかどうかではなく、真理へと進化できるかどうかの方が重要である。ただし、「真理化」されるかどうかは、一般的には「特定の信念に導かれた実践——その信念が述べているところの事実を『あてこんだ』さまざまな活動——の帰結」（浜本、前掲書：140）つまり「なんらかの利得」次第であることは間違いない。「何をしてもどうせダメ」という信念にしても、結局汗水流して努力をすることをしないわけだから、この信念のおかげで楽ができたという意味では「利得」を得ているとも考えられる。

18) 例えば、バクシやモルラは治療に際して、その前後に必ずクルアーンの読誦を入れたり、体を清めるなどナマズと同じような段取りで進める。そのため患者は、彼らの治療をイスラームと錯覚してしまう。そこで、信じれば神によって救われるという論理的秩序に乗せられ、自分の病気も好転するはずと思いこんでしまうのではないかと考えたことがある（西原、2004）。

話をイスラーム信仰に戻そう。ここまでイスラーム信仰は「賭け」だなどという発想がさらされるであろう異議を想定し、検討してきた。その上で結論づければ、やはりこう言わざるを得ない。イスラームに「賭けた」方が「得」をするからそうしたのである、と。例えば前章の冒頭で紹介した、未来の希望を語る際には「ホダーイム・ブイリサ（もし神がお望みなら）」を付けるという習慣について考えてみよう。なぜこれを行わなければいけないと考えるのだろうか。もちろん既に紹介した彼の叔母の場合のように、現実にならなければならぬから本当に不幸なことが起こったケースもあるだろう。だが、実際にはそういう言葉を使わない非ムスリムにも良いことは起こるし、悪いことも起こる。合理的に考えれば、この言葉を付けなければならないという信念は、現実的な結果だけから強固なものになったわけではない。

ではなぜこの信念が真理化したのか。ここで先ほどの「世の中なにごととも……」という信念を思い出したい。信念自体にその信念が高い確率で真理化するような要素が含まれているケースだ。「ホダーイム・ブイリサ」も実はこれに当てはまる。この言葉は仮定の話をしており、これを付けばうまく行くということを話者に約束するものではない。そのため、どちらに転んでも信念自体には傷がつかないようにになっている。つまり、いつも真理なのだ。従って、「この言葉をちゃんと付けたのになぜ成功しなかったんだ。もう二度とこんな言葉なんて言うもんか」と、信者がこの信念を放棄することなどありえない。さらに、どんな悲惨な結果になろうと「これも神の意志」だと納得することができる。直接的には自分の努力不足や誰かの邪魔でそうなったとしても、それもまた神の思召し、ということになれば過度に自分を責めたり他人を恨んだりしてストレスを溜めることもなくなる。一種の利得も得られるのだ。真理でありなおかつ利得もある信念、それが「ホダーイム・ブイリサ」を必ず付ける、ということなのである。

もちろん、この信念が真理となる前提として、神への絶対的な信頼、依存つまり「信仰」というものがなければならない。「神が同意しないのなら仕方がない、そんなことを望んだ自分が間違っていた」と諦められるほどの、神の絶対性についての信念はなぜ生まれたのだろうか。すでにその答えは提示している。イスラームの神を信仰する方が他のオプションに比べて利得があると思ったからだ。ではその利得とは何だろう。これもまたすでに提示してきた。「誰かを幸せにする」という意識を常に持っていれば、いつも気分良く「ジャマアットチリッキ（みんなが集まること）」を実現することができる。家庭や職場、そして地域に和や一体感があるとすれば、こんなに幸せなことはないだろう。最高の利得である。イスラームを信仰すれば、社会の平和と友好という利得が確実に得られる。だからウイグル族の人々はこれを選んだ。個々に、人生のどこかで。そしてそれに賭け続けている。少数民族として生き続けるために何より大事な民族内部の絆を得るために¹⁹⁾。これがウイグル族のイスラーム信仰の原点なのではないだろうか。

19) 私が「ウイグル族」という言葉を使うとき、それは基本的には新疆ウイグル自治区東部にある哈密（コムル）地区に住むウイグル族を想定している。私のこの10年来の主たる調査地がここだからだ。この哈密のウイグル族から、ナザルを行うのは自分たち哈密のウイグル族だけだと聞いたことがある。しかし現実には新疆全体でこれが行われていることを知った。そのことを指摘すると、今度は「確かにその通りだが、哈密は特にナザルの回数が多い」と返されたことがある。このやりとりには以下のような意味があるのではないだろうか。一般的に哈密のウイグル族は他の地域のウイグル族に対して優越感を抱いており、あれこれと優れた点を言い募ることが多いことから、要するにナザルもまた彼らの自慢の種の一つなのである。生者と死者、そして生きている者同士の絆を生み出すナザルに、どこに出しても恥づかしくないほど力を入れていると言ってもいい。このことから、哈密のウイグル族にとってのイスラームとは、何より「ジャマアットチリッキ」の実現だということがわかる。

あるウイグル族の青年が私に語ってくれたことがある、「心の中で私はムスリムだと強く念じれば、あなたはムスリムだ」と。やはり彼らはムスリムに生まれるのではない。ムスリムになるのである²⁰⁾。

おわりに

イスラームという言葉が「狂信」といったような色彩を帯びてとらえられることは、恐らく少なくない。この論文を書いているさなかには、アメリカのあるキリスト教会の牧師がクルアーンを焼却する計画を立てている、などという記事が飛び込んできた。イスラームを「邪悪な宗教」と見なし、その「危険性」について啓発するためだという（望月，2010）。今だにこれがイスラームのイメージなのだ。こういう報道に出会う度に、やはりイスラームの実像を、少なくとも私自身が経験してきた生のイスラームを報告し続けることが必要だと痛感する。

今回の論考では、まずはウイグル族の日常生活におけるイスラームに焦点を当て、その信仰が実は割と当たり前な倫理・道徳的なものであることを明らかにした。そして、その上でウイグル族の信仰を「信念の生態学」という考え方によって分析し、彼らは民族としてのまとまりを得られるのでイスラームを信仰しているのではないかと提案した。彼らはつながりが得られるかどうかという冷静で主体的な判断の上でイスラームを選択し、それを利用しているのである。個人主義や能力主義といった数ある「主義」からそれを選び取ったわけだから、イスラームもまた一つの「主義」にすぎないと言ってもいいだろう。その意味で、ウイグル族のイスラームは決して「狂信」的なものではない。しかもその利得は、誰かに尽くして喜んでもらい、みんなが気分良く暮らすことにすぎない。こんな当たり前でささやかな願いを実現することを確実にしてくれるから、イスラームを選んでいるのである。これの一体どこが「邪悪」で「危険」だというのだろうか。

もちろんウイグル族によるテロ活動は相変わらず散発的に発生している。昨年（2009年）7月5日の大規模な暴動事件も記憶に新しい。しかしそれは今回の論考の反例ではなく、私が本稿で提示してきたイスラームに対抗する信念、つまりオプションと考えたい。ウイグル族全員が一枚岩で同じようにイスラームを信仰している、というイメージの方が逆に非現実的であろう。様々な「対抗的信念」が「せめぎ合い、渡り合う」中で（浜本，2008：144-145）、ある信念がシェアを広げることもあるだろうし、覆されることもある。それが「信念の生態学」だ。そして、私が長年つきあってきた哈密のウイグル族においては、「誰かを幸せにする」ことが何より大切、という信念が広く普及しているように思われる。それが彼らにとっての現在のイスラームなのだ。

引用文献

- 赤堀雅幸，2002，「あいさつ」、『イスラーム辞典』，岩波書店。
井筒俊彦，1983，『コーランを読む』，岩波書店。
王 建新，1999，「ウイグル人のイスラーム信仰」、『アジア遊学』No. 1，勉誠出版，118-137頁。
小杉 泰，2002，「結婚」、『イスラーム辞典』，岩波書店。

20) ウイグル族は、父が息子にイスラームについて教える義務があると考えている。これを「父の負債（アタ・カルズィ：ata qharzi）」と呼ぶ。このような義務の存在からも、ムスリムとは生まれながらのものというよりは、学習を通してそうなるものだと、ウイグル族にイメージされていることがわかる。

- 鈴木貴久子, 2002, 「酒」, 『イスラーム辞典』, 岩波書店。
- 西原明史, 2004, 「信仰と治療——ウイグル族の宗教世界探訪——」, 『国際教育文化研究』 Vol. 4, 九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会, 19-33頁。
- 浜本 満, 2008, 「進化ゲームと信念の生態学——社会空間における信念の生態学試論Ⅱ」, 『大学院教育学研究紀要』 第11号, 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門, 125-150頁。
- ひろさちや, 1999, 『キリスト教とイスラム教 どう違うか50のQ & A』, 新潮社。
- 毛里和子, 1998, 『周縁からの中国——民族問題と国家』, 東京大学出版会。
- 望月洋嗣, 2010, 「米の教会, コーラン焼却を計画」, 9月8日朝日新聞電子版の掲載記事。
- 森 伸生, 2002, 「病気見舞い」, 「アル=ハムド・リッター」, 「サラート」, 『イスラーム辞典』, 岩波書店。

[2010. 10. 4 受理]